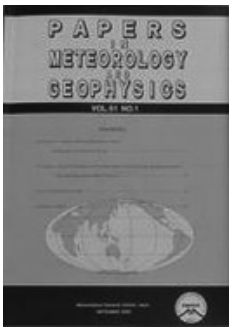
4. 刊行物・主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

4. 1. 刊行物

気象研究所研究報告（Papers in Meteorology and Geophysics）



研究成果の学術的な公表を目的とした季刊の論文誌（ISSN 0031-126X）。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論（レビュー）を掲載している。主な配布先は、国の内外の研究機関・大学、気象官署などで、国立国会図書館でも閲覧することができる。

平成 17 年度からは　独立行政法人　科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム“J-STAGE”に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL:　http://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers

平成 21 年度は第 60 巻として計 1 冊を発刊し、次の論文を掲載した。

第 60 巻

・Mano, Y.,: Maximum information composite channels of a high-resolution satellite sounder

・Mano, Y., T. Hashimoto and A. Okuyama: Verification of satellite-derived aerosol optical thickness overland with AERONET data

・山本剛靖, 小林昭夫: 近畿地方北部で観測された地殻歪の長期的変化

気象研究所技術報告（Technical Reports of the Meteorological Research Institute）

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物（ISSN 0386-4049）。主な配布先は、国立国会図書館、国内の研究機関・大学、気象官署などで、気象研究所ホームページ（http://www.mri-jma.go.jp/）でも閲覧することができる。

平成 21 年度は、第 59～61 号を発刊した。

第 59 号　「気象研究所共用海洋モデル（MRI.COM）第 3 版解説」
（辻野博之, 本井達夫, 石川一郎, 平原幹俊, 中野英之, 山中吾郎, 安田珠幾, 石崎廣）

第 60 号　「栄養塩測定用海水組成標準の 2008 年国際共同実験報告」
（青山道夫, Carol Anstey, Janet Barwell-Clarke, François Baurand, Susan Becker, Marguerite Blum, Stephen C. Coverly, Edward Czobik, Florence D’amico, Ingela Dahllöf, Minhan Dai, Judy Dobson, Magali Duval, Clemens Engelke, Gwo-Ching Gong, Olivier Grosso, 平山篤史, 井上博敬, 石田雄三, David J. Hydes, 葛西広海, Roger Kerouel, Marc Knockaert, Nurit Kress, Katherine A. Krogslund, 熊谷正光, Sophie C. Leterme, Claire Mahaffey, 光田均, Pascal Morin, Thierry Moutin, Dominique Munaron, 村田昌彦, Günther Nausch, 小川浩史, Jan van Ooijen, Jianming Pan, Georges Paradis, Chris Payne, Olivier Pierre-Duplessix, Gary Prove,

Patrick Raimbault, Malcolm Rose, 齊藤一浩, 斉藤宏明, 佐藤憲一郎, Cristopher Schmidt, Monika Schütt, Theresa M. Shammon, Solveig Olafsdottir, Jun Sun, Toste Tanhua, Sieglinde Weigelt-Krenz, Linda White, E. Malcolm. S. Woodward, Paul Worsfold, 芳村毅, Agnès Youénou, Jia-Zhong Zhang,）

第 61 号　「強雨をもたらす線状降水帯の形成機構等の解明及び降水強度・移動速度の予測に関する研究」
（大阪管区気象台、彦根地方気象台、京都地方気象台、奈良地方気象台、和歌山地方気象台、神戸海洋気象台、松江地方気象台、鳥取地方気象台、舞鶴海洋気象台、広島地方気象台、徳島地方気象台、予報研究部）

4．2. 発表会、主催会議等

気象研究所研究活動報告会

気象研究所の研究活動や研究成果について、広く社会一般の方々の理解を促進することを目的として開催するもので、気象研究所が進めている研究のうち、特に気象業務や国の施策に関係の深いものについて報告している。

平成 21 年度は、平成 21 年 9 月 30 日（水）に気象庁講堂（東京）で開催し、「解明して伝えたい　地球のいま・未来」をテーマに、以下の 3 題を報告した。

局地的大雨の監視と予測に向けて

報告者：鈴木　修（気象衛星・観測システム研究部）・斉藤和雄（予報研究部）

コメンテータ：新野　宏　氏（東京大学海洋研究所　教授）

火山活動の監視に気象学の知見・観測技術を応用

報告者：山里　平（地震火山研究部）

コメンテータ：鵜川元雄　氏（(独）防災科学技術研究所火山防災研究部　部長）

気候変動への適応は国際的な課題～途上国の気候変動将来予測への支援～

報告者：鬼頭昭雄（気候研究部）

コメンテータ：沖　大幹　氏（東京大学生産技術研究所　教授）

気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を発表することにより、気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年 1 回開催している。

平成 21 年度は、平成 22 年 3 月 12 日（金）に気象研究所講堂で開催し、以下の研究成果について発表した。

報告題目

・東南アジア地域の気象災害軽減国際共同研究
・2008 年台風特別観測（T-PARC）結果
・伊勢湾台風再現実験プロジェクト
・相似地震の発生予測実験
・地震波で地下の時間変動を監視する
・温暖化による日本付近の詳細な気候変化予測

「台風の進路予測技術の高度化に関する国際会議」（海洋政策研究財団 平成 21 年度海外交流基金）

台風は日本を含む東アジアの社会・経済に多大な影響を与えており、海上交通等においても大きなリスクとなっている。そのため、台風の予測の改善は極めて重要であり、とりわけ近年では、進路予測についての新たな研究が取り組まれている。

気象庁気象研究所は、世界気象機関（WMO）が進める「観測システム研究・予測可能性実験（THORPEX）」の一環として、昨年の夏、米国、韓国などと連携して台風特別観測実験（T-PARC2008）を実施した。これらの成果を含めた台風の進路予測技術に関する国内外の最新の知見を集約することにより、台風の進路予測技術の高度化に関する研究開発を国際的に推進するため、国内外の著名な専門家を招へいし、11 月 30 日（月）～12 月 2 日（水）にかけて日本財団ビル（東京都港区赤坂）で「台風の進路予測技術の高度化に関する国際会議」を開催した。この会議の冒頭では、台風予測技術の現状と今後の展望を広く一般の方にも知っていただけるよう、国内外の第一線の専門家による基調講演を行った（同時通訳付き）。

【基調講演】11 月 30 日（月）午前
・台風予報の現状と課題・・・・・・・　佐々木 喜一 所長（気象庁予報部太平洋台風センター）
・世界中の熱帯低気圧の予報精度・・・・Martin Miller 博士（ヨーロッパ中期予報センター）
・観測のツボの効用－2008 年台風特別観測から－・・・・
・・・・中澤 哲夫 博士（気象庁気象研究所台風研究部）
・今後の世界気象機関の研究計画・・・・David Parsons 博士（世界気象機関）

【専門家会合】11 月 30 日（月）午後～12 月 2 日（水）

環境研究機関連絡会成果発表会

「環境研究機関連絡会」とは、環境研究に携わる国立及び独立行政法人の研究機関が情報を交互に交換し、環境研究の連携を緊密にするため平成 13 年に設置されたもので、現在、気象研究所を含む 12 機関が参加している。平成 21 年 11 月 11 日（水）に一橋記念講堂（東京都千代田区一橋）で第 7 回成果発表会を開催し、気象研究所は、以下のポスター発表を行った。

① 西部北太平洋黒潮本流域における速い温暖化に対する海洋の生物地球化学的応答
② 西部北太平洋における炭酸系観測データから推定した海洋酸性化の長期変化傾向
③ 南極ウェッデルポリニアでの海洋深層二酸化炭素の大気への冬季放出
④ 榛名山における山岳大気観測と平野観測の比較
⑤ ４次元局所アンサンブル変換カルマンフィルタを用いたダスト・エーロゾルのデータ同化
⑥ 全球ダストモデル改良のためのアジアを対象としたダスト解明研究
⑦ 2009 年 7 月 27 日群馬県館林市で発生した竜巻の親雲と環境場の特徴
⑧ 火山噴火に伴う降灰の量的予測に関する研究